

赤星

月刊

7-8月 2001年 No.7 (通巻349号)

本号300円 (毎月1日発行)
年間購読料 1部3000円 (送料別)
(送料) 密封1000円 開封800円

THE SEKISEI (RED STAR / ROTE STERN)

編集 共産主義者同盟 (DER BUND DER KOMMUNISTEN)

発行所 蜂起社
発行人 南安明

東京都江東区大島3-9-25 / TEL 03-5626-8262
(関西支社) 大阪市北区菅原町10-10 岸本ビル / TEL 06-6357-6975
(振替) 00120-2-1512 蜂起社・南安明

紙面内容

- ① 共産同再建を期して 反グローバリズム日仏連帯
- ② アメリカの新しい労働運動(中)
- ③ 沖縄/三里塚/反原発/野宿
- ④ 連載「試論・ブントと新左翼運動を検証する」蔵田計成

グローバリズムと対決するヨーロッパの闘いに学ぶ フランスSUD活動家来日



EU首脳会議に抗議して街頭バリケードで闘うデモ隊

反グローバリズムの闘い欧州で燃え上がる

欧州などでWTOや世銀などグローバル化を推し進める国際会議に反対するデモの嵐が吹き荒れ、抗議行動によって中止に追い込まれる事態も相次いでいる。これは99年のシアトルにおけるWTOに対する大規模な抗議行動以来の流れに沿ったものである。

最近では6月15日からスウェーデン・イエテボリで開催された欧州連合(EU)首脳会議が、激しい抗議デモに見まわれ、夕食会場を變更された。さらに6月24日には、スペイン・バルセロナにおいて、世界銀行主催の経済会議に対して8000人のデモが機動隊と激しく衝突し、会議そのものを中止に追い込んだ。

7月には、イタリア・シエーナでG8サミット(帝国主義8カ国首脳会議)が開かれるが、新聞報道でも世界中から約10万人以上が集結し、かつてない規模の抗議行動が展開されると予想されている情勢だ。

まさに本誌前号(1面)で報告したATTACのベルナル・カッセンさんの講演でも明らかのように、反グローバリズムで決起した民衆の闘いのうねりは、国境を越えて広がって支配者どもを震撼させている。こうした中でこの6月にはフランスからSUD(連帯・統一・民主)のメンバーが来日し、交流の催しなどが持たれた。SUDは1980年代後半に形骸化・官僚化した既成労働組合の内部から、各組合の枠を越えた共闘委員会として結成された新たな労働組合である。

立ち、さらにATTACの中心メンバーとして反グローバリズムの国際的な闘いを担ってきた。昨年11月の来日におけるアギントンさんと山谷をはじめとした日本の底辺・下層の労働者との連帯交流の成果は記憶に新しい。その上で、ATTACのベルナル・カッセンさんの来日講演、そしてSUDのメンバーの来日もフランスの運動を学び、国境を越えた連帯を目指す上で大きな意味がある。

今回来日したのは、SUDのDIPPT(郵便・電信・電話部門)の創設者から加わり、ここからACCを結成して失業者の運動の先頭に立ち、我々が「破防法弾圧と闘う会」の責任者であった倉田豊寛氏の71年12月2日の日向(戦旗)派によるテロ襲撃——倉田氏は頭蓋骨等に重傷を負われた——について、「重大な誤りであり……破防法裁判闘争を支える会」の活動に、実際上、敵対の結果せめて「という」自己批判書」が、当時の「戦旗・共産同」から実に11年目の82年2月8日に提出されたことについてであった。(蜂起82年3月号掲載)

ところが彼らが標榜して成し遂げようとしている「プロレタリア革命の実現・勝利のために結成された政治組織」のこのことである。共産主義者(たまたま組織名として)を組織している。(3面に続く)

お知らせ
本号は7-8月合併号とし、8月は休刊となります。(編集部)

ローテ・シユテルン
せんき(日向派)の染み着いたマヌーバー政治

ブントを名乗る日向派は機関紙SEKISEI(25付第1046号)紙上で、「未だ前衛史観にとらわれた人々」と題する特集(3面)を組み、「赤い馬? 一体どの馬の骨だ(淡谷)としたり顔で我々を誹謗中傷し因縁をつけるための記事掲載した。まったく相も変わらぬマヌーバーやデマゴギーを旨とする政治思想・組織体質をさらけ出している。他「赤井隆樹などがしきりに『ブントの再建』を口にするが、いかに姿・形を

えも(その根っこ)染み着いた組織体質——黒田密輸入したルーツ——から抜け出せず、未だに呪縛されているかを自覚すべきであらう。本稿は、当初の予定を変更して——道草を食うことを承知の上で——紙幅を彼らへの反論に割くことにした。

彼ら(日向派)は、よほど我々の言動や動向に関心があるらしい。「この馬の骨」か分からない小党派に何故とさう左様に心細やかならぬもの(無視し難いもの)を感じてしまっているのか。

にもかかるらしいのだ。「誰かが自由かってにブントの再編・統合など口にしていいわけはないだろう。生意気を通りかして非常識だ」と自分たちを無視して勝手に「ブント再建」など言われては困るといふことが、ブントらしくもつてお

「前衛主義」だの「セクト主義」だの他を批判するのは、気が悪いブラック・ジョークという他あるまい。最近でも、かつて「赤いヘルメットをかぶった革命」の理由があるのだろうか、ブントらしくもつてお

て見えるだけだ。時流に敏感なだけで簡単に流言に惑わされるようでは底が浅いと云わざるを得ない。

我々蜂起派と彼ら日向派との関わりで、かつてどうした「組織から追放」したなどデマゴギーを飛ばしている。我々は、組織

希望の星 赤い共産同(ブント)再建を期して なすべきことをなそう!

のようだ。だが残念ながら我々は彼らの「常識」にも「要望」にも応える気はさらさらしない。我々は、共産主義運動・新左翼運動の再生を目標として(そのために)共産同(ブント)の再建に挑

うように構えた方がいいのではないのか。そもそも70年代初頭の『連合赤軍』事件など悪名高まった「ブント」の名を……パラダイムを取るにはかなり無理がある、大衆は(日向派)の独

から追放し除名した者について、公表することをためらったりはしない。彼らが、いくら我々の組織事情におおへまだろう。我々が機関紙上で彼らに言及したのは恐ろしく82年以後だ。それは、「破防法裁判闘争を支える会」事務局員

でに数少ないのかもしれないが、その歴史的事実の一端くらいは明らかにしておくべきだろう。我々が機関紙上で彼らに言及したのは恐ろしく82年以後だ。それは、「破防法裁判闘争を支える会」事務局員

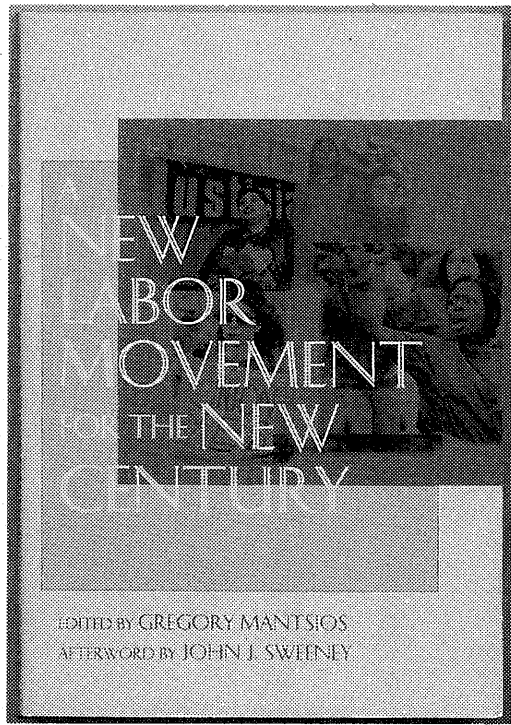
あり、我が「破防法弾圧と闘う会」の責任者であった倉田豊寛氏の71年12月2日の日向(戦旗)派によるテロ襲撃——倉田氏は頭蓋骨等に重傷を負われた——について、「重大な誤りであり……破防法裁判闘争を支える会」の活動に、実際上、敵対の結果せめて「という」自己批判書」が、当時の「戦旗・共産同」から実に11年目の82年2月8日に提出されたことについてであった。(蜂起82年3月号掲載)

《中》 社会運動の支柱・組織者へ 労働運動それ自体の変革と再定義

アメリカ

『新しい世紀のための新しい労働運動』 ニュー・ボイス派の主張を読む

横 渡



『新しい世紀のための新しい労働運動』の表紙

「ニュー・ボイス(新しい声)」派を中心としたアメリカの新しい労働運動が、1995年10月に行われたAFL-CIO(アメリカ労働総同盟・産業別組合)の会長選挙で勝利し指導部の交代をもたらした。それは、アメリカの労働運動にとって、まさに「惨めな時代と旧殻」から訣別し、新時代を拓く歴史的な画期・転換を告げる出来事だった。

このアメリカ労働運動に転換と再生をもたらしたニュー・ボイス派の主張や活動家・研究者らの議論・提言をまとめた論文集『新しい世紀のための新しい労働運動』(98年3月、マンズリー・レヴィ社発行)が、クレイジー・マンツィオス(タインズ大学教授・労働者教育部長)の編集によって出版され、その日本語版(要訳)として『21世紀に向けた新しい労働運動』が、連合・総合組織局から99年9月に発行された。

本稿は、この『新しい世紀のための新しい労働運動』を読み、その示唆に富んだ内容を吟味することによって、今後、この国(日本)の労働運動に転換と再生をもたらす一助(ヒント)になることができれば、という思いから執筆したものである。

今回『中』は、論文集『新しい労働運動』の中の第一部「民主主義、イデオロギー、変革の3章」(旧版の中の新しい労働運動とは4章)を、労働組合は何のために闘つのか、について述べてきた。

この論文集の内容は、この限りの具体的紹介が、紙幅に制約があり、主要点を解説するに止めた。

第一部「民主主義、イデオロギー、変革」では、労働運動の内外で民主主義の課題がどう捉えられ、実践されているかが提起されている。この3章で、シエラ・フレッカー(彼女は、労働者社会運動に関する研究者で8冊の著書がある)とティム・コステロ(彼は、20年以上にわたる労働組合活動家)が、この間は、ボストンの全米サービス従業員組合(SERU)ローカル2000の代表を務めている)は、「旧殻

の中の新しい労働運動とは」というテーマで、「新しい労働運動」を目標としてAFL-CIOの指導権をつかんだ「ニュー・ボイス(新しい声)」派の選挙綱領を解説している。

旧来の指導部によって代わって、ビジネス・ユニオニズムの過去と訣別し、AFL-CIOは、「社会運動の支柱でなければならぬ」と宣言したニュー・ボイスのこの綱領を、二人は、全体的には評価している。

だが、「新しい労働運動を構築しようとするいかなる努力も、AFL-CIOの伝統的ともいえる保守性に直向し、その固く歪んだ旧殻「官僚的な弊害、組織的惰性」から抜け出すには、「社会運動的な労働運動への変革が必要である」と述べ、たしかに「危機に瀕すれば、官僚でさえ変わる」が、その「変革」が、旧来型の「ビジネス・ユニオニズムの戦闘化」にすぎない限りは、労働運動の再生は成功しないといっている。

ニュー・タンナミクス「ニュー・ボイス」は、AFL-CIOの主張を、ビジネス・ユニオニズムのそれから社会運動は、ニュー・ボイスが「連

帯に力点を置いているものにするための制度的手段を提案した。しかしながら、労働法、組合構造、官僚的な弊害、組織的惰性による制度的な拘束に挑戦した者はほとんどいなかった。

「先行きも考えずこれまで通り民主主義への支援を続けよう」というニュー・ボイスのリーダーたちの中には、「一般組合員が指導権を持つことを拒否したり、自分の組合の組合員のストライキを壊すリーダーさえいた。……それにもかかわらず、消滅の危機に瀕すれば、官僚でさえ変わる」とは知られている。

「AFL-CIOの指導部が望んでいる変革とは、せいぜいビジネス・ユニオニズムの戦闘化であり、その内容は、活発な組織化やストライキ志向の拡大を、上からの統制と結びつけるものである。しかしながら、労働運動が本質的に活性化するには、社会運動的な労働運動への変革が必要である。その過程で、草の根の活発な運動が、アメリカの労働組合に典型的な強固な官僚的性格にどうにかわっていかなくてはならない」と述べている。

「冷戦期、AFL-CIOの国際的事業は、事実上、アメリカ外交政策の片腕であり、しばしば世界中のあちこちで独裁体制を支持していた。ビジネス・ウィーク誌は、……『中央情報局(CIA)の労働組合版』として描いた。……AFL-CIOの海外での活動の主たる資金供給源は、米政府であった。」

さらに二人は、労働組合が「特権的労働者の特別な利害を代表する」ような「非民主的官僚性格の強い組織構造」を思い切った変革しなければ成功の見込みはないと警告している。

そして、ニュー・ボイスの綱領が、新たに人種・民族・ジェンダーの観点から重視されるべき経済的取引のためには、人権創造へと力点を置き、「労働運動の役割を再定義」し、労働運動は、「働く人々全て」に、失業者や貧民など「労働組合を必要としている人々の代弁者(ボイス)でなければならぬ」と宣言した。……過去と訣別して、ニュー・ボイス指導部は、連帯に力点を置こうとした。そして、AFL-CIOを戦闘的な闘いと結びつけようとした。

「労働組合について広く行き渡っているイメージは、主に組合役員や特権的労働者の特別な利害を代表する官僚主義である。ニュー・ボイス綱領……には、労働運動の役割を再定義し、新たに人種・民族・ジェンダーの転換が成功するかどうかにかかっている」と指摘している。

組織化
「ニュー・ボイスの表では、組織化を単なる経済的取引のための手段ではなく、人権のための運動として再定義されている。それは、職場での組織化を越えて大衆運動の創造へと移っていく戦略を描いている。……」

「中央情報局(CIA)の労働組合版」として描いた。……AFL-CIOの海外での活動の主たる資金供給源は、米政府であった。」

さらに二人は、労働組合が「特権的労働者の特別な利害を代表する」ような「非民主的官僚性格の強い組織構造」を思い切った変革しなければ成功の見込みはないと警告している。

そして、ニュー・ボイスの綱領が、新たに人種・民族・ジェンダーの観点から重視されるべき経済的取引のためには、人権創造へと力点を置き、「労働運動の役割を再定義」し、労働運動は、「働く人々全て」に、失業者や貧民など「労働組合を必要としている人々の代弁者(ボイス)でなければならぬ」と宣言した。……過去と訣別して、ニュー・ボイス指導部は、連帯に力点を置こうとした。そして、AFL-CIOを戦闘的な闘いと結びつけようとした。

「労働組合について広く行き渡っているイメージは、主に組合役員や特権的労働者の特別な利害を代表する官僚主義である。ニュー・ボイス綱領……には、労働運動の役割を再定義し、新たに人種・民族・ジェンダーの転換が成功するかどうかにかかっている」と指摘している。

組織化
「ニュー・ボイスの表では、組織化を単なる経済的取引のための手段ではなく、人権のための運動として再定義されている。それは、職場での組織化を越えて大衆運動の創造へと移っていく戦略を描いている。……」

「ニュー・ボイス」派を中心としたアメリカの新しい労働運動が、1995年10月に行われたAFL-CIO(アメリカ労働総同盟・産業別組合)の会長選挙で勝利し指導部の交代をもたらした。それは、アメリカの労働運動にとって、まさに「惨めな時代と旧殻」から訣別し、新時代を拓く歴史的な画期・転換を告げる出来事だった。

この論文集の内容は、この限りの具体的紹介が、紙幅に制約があり、主要点を解説するに止めた。

第一部「民主主義、イデオロギー、変革」では、労働運動の内外で民主主義の課題がどう捉えられ、実践されているかが提起されている。この3章で、シエラ・フレッカー(彼女は、労働者社会運動に関する研究者で8冊の著書がある)とティム・コステロ(彼は、20年以上にわたる労働組合活動家)が、この間は、ボストンの全米サービス従業員組合(SERU)ローカル2000の代表を務めている)は、「旧殻

の中の新しい労働運動とは」というテーマで、「新しい労働運動」を目標としてAFL-CIOの指導権をつかんだ「ニュー・ボイス(新しい声)」派の選挙綱領を解説している。

旧来の指導部によって代わって、ビジネス・ユニオニズムの過去と訣別し、AFL-CIOは、「社会運動の支柱でなければならぬ」と宣言したニュー・ボイスのこの綱領を、二人は、全体的には評価している。

だが、「新しい労働運動を構築しようとするいかなる努力も、AFL-CIOの伝統的ともいえる保守性に直向し、その固く歪んだ旧殻「官僚的な弊害、組織的惰性」から抜け出すには、「社会運動的な労働運動への変革が必要である」と述べ、たしかに「危機に瀕すれば、官僚でさえ変わる」が、その「変革」が、旧来型の「ビジネス・ユニオニズムの戦闘化」にすぎない限りは、労働運動の再生は成功しないといっている。

ニュー・タンナミクス「ニュー・ボイス」は、AFL-CIOの主張を、ビジネス・ユニオニズムのそれから社会運動は、ニュー・ボイスが「連

帯に力点を置いているものにするための制度的手段を提案した。しかしながら、労働法、組合構造、官僚的な弊害、組織的惰性による制度的な拘束に挑戦した者はほとんどいなかった。

「先行きも考えずこれまで通り民主主義への支援を続けよう」というニュー・ボイスのリーダーたちの中には、「一般組合員が指導権を持つことを拒否したり、自分の組合の組合員のストライキを壊すリーダーさえいた。……それにもかかわらず、消滅の危機に瀕すれば、官僚でさえ変わる」とは知られている。

「AFL-CIOの指導部が望んでいる変革とは、せいぜいビジネス・ユニオニズムの戦闘化であり、その内容は、活発な組織化やストライキ志向の拡大を、上からの統制と結びつけるものである。しかしながら、労働運動が本質的に活性化するには、社会運動的な労働運動への変革が必要である。その過程で、草の根の活発な運動が、アメリカの労働組合に典型的な強固な官僚的性格にどうにかわっていかなくてはならない」と述べている。

「冷戦期、AFL-CIOの国際的事業は、事実上、アメリカ外交政策の片腕であり、しばしば世界中のあちこちで独裁体制を支持していた。ビジネス・ウィーク誌は、……『中央情報局(CIA)の労働組合版』として描いた。……AFL-CIOの海外での活動の主たる資金供給源は、米政府であった。」

さらに二人は、労働組合が「特権的労働者の特別な利害を代表する」ような「非民主的官僚性格の強い組織構造」を思い切った変革しなければ成功の見込みはないと警告している。

そして、ニュー・ボイスの綱領が、新たに人種・民族・ジェンダーの観点から重視されるべき経済的取引のためには、人権創造へと力点を置き、「労働運動の役割を再定義」し、労働運動は、「働く人々全て」に、失業者や貧民など「労働組合を必要としている人々の代弁者(ボイス)でなければならぬ」と宣言した。……過去と訣別して、ニュー・ボイス指導部は、連帯に力点を置こうとした。そして、AFL-CIOを戦闘的な闘いと結びつけようとした。

「労働組合について広く行き渡っているイメージは、主に組合役員や特権的労働者の特別な利害を代表する官僚主義である。ニュー・ボイス綱領……には、労働運動の役割を再定義し、新たに人種・民族・ジェンダーの転換が成功するかどうかにかかっている」と指摘している。

組織化
「ニュー・ボイスの表では、組織化を単なる経済的取引のための手段ではなく、人権のための運動として再定義されている。それは、職場での組織化を越えて大衆運動の創造へと移っていく戦略を描いている。……」

沖縄米兵による性暴力事件弾劾 7・1反安保・沖縄連帯行動に200名



7・1集会 (文京区民センター)

いま、沖縄では怒りが極限に達している。米兵による性暴力事件への怒りだ。6月29日午前2時に酔った米兵に暴行された若くは女性からの訴えがあり、米軍嘉手納基地所属の軍曹(空曹)が取り調べられている。昨年7月に女子中学生が強制わいせつ被害にあった。どなたが沖縄は性暴力の被害にあわなければならぬのか。「軍隊が存在することによって起り続けている女性への性暴力事件は私たちが日常を享受するあたりまでの権利を踏みにじている」(「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」の抗議声明)。

そしてもうひとつが、普天間飛行場の移設(基地のたらい回し)問題だ。名護市辺野古に計画されている新基地建設について日本政府は「30法8案」を示した。当初は滑走路1300メートルであった計画が、



立ち木伐採に抗議する反対同盟

今回の案は2600メートルという巨大基地構想になっている。「この滑走路なら大型輸送機やジェット機などすべての軍用機が事実上運用可能」(前田哲男・東京国際大学教授)というほど巨大プロジェクトだ。建設費は数千億円から1兆円ともいわれている。このように税金をかけることが「聖域なき構造改革」なのかどうなるかという非難が集中している。

このような状況の中で、日本政府による土地強奪に抗する沖縄・反戦地主の闘いは意気軒高と闘われている。読谷村の楚辺通所と浦添市の牧港補給地区の2つの土地は、知花昌一さんと古波蔵豊さんの闘いにより今年3月末までに使用期限が切れている。度重なる米軍用地特別措置法の改正によって継続使用が難しくなっている。収用委が強制使用を裁決(6月28日)したとほ

東峰神社立ち木伐採弾劾 三里塚 7・15現地闘争へ

6月16日、空港公団は大量の機動隊と私服刑事を動員して、東峰神社の立ち木伐採を強行し、反対同盟事務局次長の秋原進さんを不当にも逮捕した。我々はこの暴挙を満腔の怒りを込めて弾劾する。

当日、早朝から東峰神社周辺は機動隊によって封鎖され、クレーンなどの重機が統々と搬入される。そして厚紙で神社の立ち木(ヒノキやサクラの木など19本)の伐採作業を強行した。この立ち木は東峰住民の大切な共有財産であるにもかかわらず、空港公団は住民に何の断りもなく、暴力的な強奪を行ったのだ。この事態に対し、東峰住民

国は野宿の責任をとれ 9月全国から国会へ!

6月19日、「ホームレス自立支援立法の早期成立」を求める集会(よびかけ)を掲げて沖縄連帯集会とつながり、約200名の参加をえ、新宿連絡会が、衆議院第一議員会館において開かれた。厳しい野宿生活を余儀なくされている労働者が、新宿を中心とした山谷、池袋、ロジックチームが議員立法としてまとめたものだ。

野宿労働者が増大していることを現状として受け止め「自立の支援」「生活上の支援」などについて国に責任があることを認め、必要な施策を講ずることを法案の目的としている。民主党は集会に先立ち6月14日に衆議院に上程。現時点では継続審議になっている。

9月には全国の野宿労働者に呼びかけて国会行動が準備されている。国に野宿の責任をとらせるために、野宿労働者自身の起ちあがりに断固連帯していこう。8・4山谷夏祭り、8・12新宿夏祭りから9月全国行動に結集しよう!

大阪・釜ヶ崎で野営闘争に突入
大阪・釜ヶ崎では反失速車が、6月4日から府庁前・大坂城公園に拠点を設定し野営闘争に突入。野宿生活者支援法制定・高齢者特別就労事業の拡大などの要求を掲げ起ち上がった。(神谷)

野宿労働者が増大していることを現状として受け止め「自立の支援」「生活上の支援」などについて国に責任があることを認め、必要な施策を講ずることを法案の目的としている。民主党は集会に先立ち6月14日に衆議院に上程。現時点では継続審議になっている。

野宿労働者が増大していることを現状として受け止め「自立の支援」「生活上の支援」などについて国に責任があることを認め、必要な施策を講ずることを法案の目的としている。民主党は集会に先立ち6月14日に衆議院に上程。現時点では継続審議になっている。

労働組合は何のために存在し闘うのか?
第一部の4章では、この論文集の編集者を務めたタケコリ・マンツィオス・レコリンズ大教授、労働者教育部長として大学付属の労働者教育センターや労働資料センターで労働者教育のために人材を育成している「労働」という問いに答えるには、「基本的なものの見方や考え方を検証することに十分な注意が払われなければならぬ」と、労働運動内に未だに存在するイデオロギーの違いを諷刺した。その違いを諷刺した。その違いを諷刺した。その違いを諷刺した。

あるべきか」と問いを発し、階級間人種間の不平等・不正を鋭く批判する階級的な視点をもっと求めたい。階級意識に重点を置くことも労働者を分断している人種・ジェンダー等の差別問題にも向き合いたい。労働運動は今日まで、イデオロギーの上で、あるいは実践の上で、一枚だけたたかっていた。労働組合の思考上の枠組みは、次の三つのパラダイムに分かれる。「プラグマティズム型労働運動」、「社会契約型労働運動」、「階級闘争型労働運動」である。

「いずれにせよ、労働組合は思考上の方向性の転換を図らなければならない」とある。新しい地球規模の条件が逆風となって労働者や労働運動に襲いかかる中で、また指導部がその前任者と違った路線を選ぶ中で、現状は労働組合の思考を検証するまたない時期である。」(続きは次回へ)9月号に掲載

6月16日、空港公団は大量の機動隊と私服刑事を動員して、東峰神社の立ち木伐採を強行し、反対同盟事務局次長の秋原進さんを不当にも逮捕した。我々はこの暴挙を満腔の怒りを込めて弾劾する。

当日、早朝から東峰神社周辺は機動隊によって封鎖され、クレーンなどの重機が統々と搬入される。そして厚紙で神社の立ち木(ヒノキやサクラの木など19本)の伐採作業を強行した。この立ち木は東峰住民の大切な大切な共有財産であるにもかかわらず、空港公団は住民に何の断りもなく、暴力的な強奪を行ったのだ。この事態に対し、東峰住民

原さんは翌日釈放を勝ち取り市東さんで集まりが持たれた。秋原さんからは、反対同盟一丸となった実力闘争と東峰部全体で立ち上がった闘いの地平を、平行滑走路路砕へ断固闘い抜く決意が述べられた。

この立ち木伐採の暴挙と時を同じくして、国会では土地収用法改悪案が15日衆議院本会議を通過した。反対同盟は12、13、15日と緊急の国会前行動を闘い抜いた。問答無用の立ち木伐採と住民運動つぎの土地収用法改悪を徹底して弾劾し、農地死守・実力闘争の地平で暫定滑走路完成を阻止しよう。7・15三里塚現地闘争へ!

また思想的内表としても投げ捨てた。彼らからするとと揚棄したのかもしれない。一日向派が、いかにアン次フロントの系譜をひいた組織であったとしても、もはや共産同(フロント)の一分派と見なすのは困難であり無縁の存在と言わねばなるまい。フロント系諸派の名を列挙し(塩見まで挙げ)、自分たちも「もちろんフロント」だと言おう。態度は、余りにも未練がましく顔を相手に投影して「善

とも、誰も(どの党派も)日向派を共産同の一派と見なしてはいない、といっている。自分たちは「いかにアン次フロントの系譜をひいた組織であったとしても、もはや共産同(フロント)の一分派と見なすのは困難であり無縁の存在と言わねばなるまい。フロント系諸派の名を列挙し(塩見まで挙げ)、自分たちも「もちろんフロント」だと言おう。態度は、余りにも未練がましく顔を相手に投影して「善

名に傷が付くのではないか。中途半端な「パラダイム・チェンジ」は極めて思い切ったフロントなことを名称も「粉らわして迷惑なのは我々も同じだ。そもそも共産主義者同盟と「間違われて」困るのではないかと「早く」と捨てて抜本的に改称した方がよいのではないかと。ついでに「もっと根底的(ラディカル)に組織の体質改善を図ることを勧めたい。」

稿 試論「ブントと新左翼運動を検証する」

連載第3回 60年安保闘争とブント主義の捉え返し

蔵田計成

第三章 一・二七国会構内大抗議集会

ブント全学連を先頭に労働者・学生の国会デモは、59年11月27日、国民会議が運動方針とした国会請願にとどまらず、大衆実力闘争―国会構内突入し座り込みを貫徹した。ブント安保全学連がつちがてた最初の金字塔といえる。ある労働者は、僕たちの手の届かないような高い雲の上で生活に関係の深い重大なことが決まってしまう。その国会へ僕たちははじめてたどり着いたのだ。このときはじめて、国会が自分のものになったような気がした(手記に残している)。

政府は、緊急閣議を開き「国会の権威を汚す有史以来の暴挙である」と声明。一方、国会突入という事態にあわせた浅沼稲次郎社会党書記長、岩井章総評事務局長は宣伝カーの上から解散を命じ、共産党の神山茂夫も総評支持と演説。共産党は翌日アカハタ野外で挑発行動で統一行動の分裂を画ってきた極左・反共トロツキストたちの行動を粉砕せよと書いた。

「安保は重い」というのが既成左翼指導部の口癖であったが、闘争開始数ヶ月を経た五九年十一月二十七日、反安保のマグマは爆発した。東京地評「全学連」の常任幹事会議はウチキ屋(鈴仙)の二階で行われた。結果的にはこれが「ラッキョンの謀議」となった。

この路上に向けて突っ込ませよう。不意をつかれたかたちで警備が手薄になるはずだ。そのスキを突いて阻止線を強行突破する。その場所には最強の労働者、学生部隊を配置する。

さらに地評「全学連」ラッキョンの席上では、全学連「国会構内大抗議集会」を二日間の座り込み、東大生協による炊き出し」を提案したが、「これ以上コトを大きく進めていくとパトロツキストの挑発、大衆的テロリズム、小ブル急進主義……」さらに全学連に「全員請願」の方針を戦術的に拡大解釈する理由と余地がない。労働者は二日間に休むを取ってはいないはず」などの理由で退けられた。

この際密作戦は劇的な成功を収めた。「全員で請願しよう」というシュプレヒコールの大合唱を背に受け先頭部隊が突破口を切り開いた。他の阻止線も相次いで寸断された。この瞬間に国会包囲作戦は完全に成功した。闘いはそれに留まらなかった。国会議事堂にたどり着いたデモ隊の一部は、扉や植え込みを飛び越えて構内に侵入し、国会通の全過程の構図を追求するに十分であった。しかし、安保全学連にとっても全員が請願の列に殺到し、このように困難に直面しようた。こうして国会構内は深夜まで万全の「請願者」であふれ、組合旗や自治会旗で埋め尽くされた。東京地評「全学連」を先頭に闘いは、確実に次なる運動の高揚をもたらすかにみえた。しかし、事態はまったく逆な方向に展開した。国民会議の統制に従わないで警備の阻止線を突破し、敵の挑発に乗って警備の手薄な構内に乱入し、解散の呼び掛けを無視して抗議集会を強行した全学連の行動に對して、集中砲火が浴びせられた。国家権力やマスコミばかりか、闘争を低い水準に押しとめて「国民の幅広い支持」(幅広アトム)を得るといって共産党、全学連反左派流から、あらゆる表裏を用いた非難の洪水が浴びせられた。常軌を逸した暴挙、極左日和見主義、トロツキストの挑発、大衆的テロリズム、小ブル急進主義……。さらに全学連に對する社会党、総評、国民会議の批判の矛は、奇妙なことに請願のために構内に入らなかつた。この構内突入は、職場や地域でこの強まる闘争への共感と決意の高揚を前に戦慄し、なりふり構わずに運動の沈黙化に乗り出した。

おける政治的攻防戦のなかにもっとも鮮やかに凝結されており、同時にこれを基点にして展開されたのである。具体的には、既成左翼指導部の保身しがらみの下にある細胞組織、労働組合組織、学生自治会組織のくみきから、ほとぼりするエネルギーを解放することが如何に困難なことが、そのカベの厚さを思い知る他はなかった。カベとは何か。何がそれを拒んでいるのか。それを突き抜ける順路と論理、運動と組織化の相互関連性、突破口がどこにあるのか。その方法と論理。こうした課題を抱えながら次なる激闘が開始された。(以下次号)

デモ隊2万数千人が国会構内に突入(59年11月27日)



「安保は重い」というのが既成左翼指導部の口癖であったが、闘争開始数ヶ月を経た五九年十一月二十七日、反安保のマグマは爆発した。東京地評「全学連」の常任幹事会議はウチキ屋(鈴仙)の二階で行われた。結果的にはこれが「ラッキョンの謀議」となった。

この路上に向けて突っ込ませよう。不意をつかれたかたちで警備が手薄になるはずだ。そのスキを突いて阻止線を強行突破する。その場所には最強の労働者、学生部隊を配置する。

さらに地評「全学連」ラッキョンの席上では、全学連「国会構内大抗議集会」を二日間の座り込み、東大生協による炊き出し」を提案したが、「これ以上コトを大きく進めていくとパトロツキストの挑発、大衆的テロリズム、小ブル急進主義……」さらに全学連に「全員請願」の方針を戦術的に拡大解釈する理由と余地がない。労働者は二日間に休むを取ってはいないはず」などの理由で退けられた。

この際密作戦は劇的な成功を収めた。「全員で請願しよう」というシュプレヒコールの大合唱を背に受け先頭部隊が突破口を切り開いた。他の阻止線も相次いで寸断された。この瞬間に国会包囲作戦は完全に成功した。闘いはそれに留まらなかった。国会議事堂にたどり着いたデモ隊の一部は、扉や植え込みを飛び越えて構内に侵入し、国会通の全過程の構図を追求するに十分であった。しかし、安保全学連にとっても全員が請願の列に殺到し、このように困難に直面しようた。こうして国会構内は深夜まで万全の「請願者」であふれ、組合旗や自治会旗で埋め尽くされた。東京地評「全学連」を先頭に闘いは、確実に次なる運動の高揚をもたらすかにみえた。しかし、事態はまったく逆な方向に展開した。国民会議の統制に従わないで警備の阻止線を突破し、敵の挑発に乗って警備の手薄な構内に乱入し、解散の呼び掛けを無視して抗議集会を強行した全学連の行動に對して、集中砲火が浴びせられた。国家権力やマスコミばかりか、闘争を低い水準に押しとめて「国民の幅広い支持」(幅広アトム)を得るといって共産党、全学連反左派流から、あらゆる表裏を用いた非難の洪水が浴びせられた。常軌を逸した暴挙、極左日和見主義、トロツキストの挑発、大衆的テロリズム、小ブル急進主義……。さらに全学連に對する社会党、総評、国民会議の批判の矛は、奇妙なことに請願のために構内に入らなかつた。この構内突入は、職場や地域でこの強まる闘争への共感と決意の高揚を前に戦慄し、なりふり構わずに運動の沈黙化に乗り出した。

おける政治的攻防戦のなかにもっとも鮮やかに凝結されており、同時にこれを基点にして展開されたのである。具体的には、既成左翼指導部の保身しがらみの下にある細胞組織、労働組合組織、学生自治会組織のくみきから、ほとぼりするエネルギーを解放することが如何に困難なことが、そのカベの厚さを思い知る他はなかった。カベとは何か。何がそれを拒んでいるのか。それを突き抜ける順路と論理、運動と組織化の相互関連性、突破口がどこにあるのか。その方法と論理。こうした課題を抱えながら次なる激闘が開始された。(以下次号)

〈訂正〉
前号の蔵田氏寄稿論文で4面最後の「このように「ブント」の後に「は闘争の戦術的展開を追求する」という「階級の利益」と、その闘争の自己貫徹をが入ります。お詫ひし訂正します。

〈編集部註〉

59年11・27国会構内突入集会かちとる
60年改定される日安保条約はアメリカの極東軍事戦略に日本を組み込む実質的な日米軍事同盟であり、自衛隊の核武装や海外派兵に結びつくとして、かつてない大衆的な反対運動が取り組まれた。この安保闘争の受け皿となったのが、総評を中心として134の実行団体が加盟した「安保改定阻止国民会議」である。ブント全学連は59年3月末に青年学生共闘会議の一員として加盟。ブントは全組織をあげて闘い抜くことを宣言。59年10月、ブント高成部書記長はこう演説した。「ブントはこの闘いに組織をあげてとりくむ。50年レッドパージ闘争のように大衆ストライキのもと学校を占拠し、これを拠点にして警職法闘争の如く国会を労働者とともに包囲し、1日のスト・デモで終わることなく砂川闘争のように権力と対峙しながら日夜連続して闘い抜く」代々木にて国会玄関前広場を占拠した。